

ゼミ紹介(土井ゼミ)

心理学科3年
肥田知浩(ひだ ちひろ)

私は土井ゼミに所属しており、12名が在籍しています。土井先生は学校臨床が専門であり、スクールカウンセラーとしても活躍されています。他にも対人援助職の方への支援、子どもに向けての支援も行っており、幅広い支援を行っている先生です。関西弁で話されているからかもしれませんが非常に気さくで話やすく、活動的な先生なため、ゼミ内の雰囲気明るくしてくれます。

3年前期では主に個人発表、グループ発表、子育て支援センターへの見学、社会福祉学部とのゼミと合同で事例検討会を行いました。個人発表、グループ発表とは、ゼミ生の興味、関心のある内容について、学生がテーマ、構成、準備などを全て決めていき、発表するというものです。内容は心理学に関するものであれば何でも良く、そのためPTSD、遊戯療法、LGBTQ、思春期など、多種多様なテーマが見られました。

発表の準備に関しては、個人発表が20分、グループ発表が60分以上行う必要があり、また私自身発表することに苦手意識があったため、大変だと感じることもありました。しかし発表資料を作成していく中で、色々な文献に触れる機会になり、発表前と比べて知識も得ることができたと思っています。またグループ発表では、ゼミ生と計画を立てながら協力して作成していったため、資料の完成時、発表の終了時には大きな達成感を感じることもできました。

発表内では土井先生とゼミ生が一緒になって意見交流をする

機会もあり、様々な意見が飛び交う中で、こんな視点もあるのか、といった気づきを得ることができました。特に土井先生からは、心理士としての視点から、豊富な知識と経験に基づく考えを聞くことができ、良い学びを得る機会にもなったため、とても有意義な時間であったと感じています。

後期からは本格的に卒論に向けて動き出していきます。大変なことも多いと思いますが、ゼミ全体で協力しあって取り組んでいきたいと思っています。



心理実習体験記 児童養護施設

心理学科4年
小島一夏(こじま いちか)

私は、児童養護施設において心理実習をさせていただきました。児童養護施設は、社会的養護の必要な子どもたちに対して、適切な養育環境を提供し、退所後も継続して支援を行うことを目的としています。そのような児童養護施設で実習を行う中で、気づいたことを2つ述べます。

1つ目は、当たり前にある権利を擁護するということについてです。例えば、叱ることで言えば、実習前は職員の方が子どもに対して、優しく諭すように伝えるのかと思っていました。しかし、実際は厳しく叱ったり、時には冷静に目を合わせて伝えたりと、その子どもにあった伝え方で、対人関係のあり方を教えているように見えました。このことから、保護者が子どもにその行為の良し悪しを暴力ではなく言葉で教えるというような家庭本来のあるべき姿が映し出されていると感じました。この家庭のあるべき姿を提供するように、児童養護施設は子どもたちが生まれながらにして保障されている権利を護っているのだと思いました。

2つ目は、児童養護施設の支援対象者についてです。実習前は児童養護施設の対象者は子どもだけだと思っていましたが、実際は保護者も含まれていることに気づきました。児童養護施設で暮らすことになった要因の全てが保護者にあるわけではありません。保護者の特性や子どもの特性、保護者自身の養育環境や地域性等の問題が複雑に絡み合った結果であると考え

ます。だからこそ、「子どもたちが家族のもとに安心して帰る」という最終的な目標に向けて、職員の方々が保護者に対して適切な支援を行う必要があるのだと学びました。

5日間という短い期間ではありましたが、1日1日が深い学びを得ることができた実習となりました。実習前は養護施設とはこういうのだと決めつけているところがありましたが、実際は異なる点がいくつもありました。今後はこの経験を活かして、偏った見方や思い込みに関われない広い視野を持った支援者を目指していこうと思います。



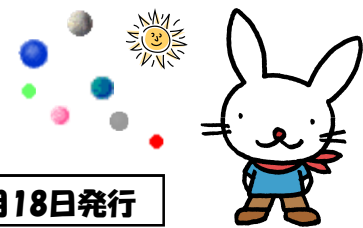
編集後記

教育・心理学部ニュースレター24号をお届けします。3学科体制となり、教員学生一体となってコロナ禍の困難から抜け出し新たな飛躍を遂げつつある姿をお知らせします。(編集長)

●●● 日本福祉大学

教育・心理学部ニュースレター

第24号 2024年10月18日発行



この号の主な内容

・学部長挨拶	・授業紹介「総合演習Ⅰ」全体企画
・学生によるコラム「海外保育研修を通して保育に関わる「あたりまえ」を問い直す」	1 ・サークル 合奏研究会吹奏楽団(合奏研)紹介 3
・「社会的養護内容演習」(子ども発達学科)紹介	・ゼミ紹介(土井ゼミ)
・教員紹介 学校教育学科 鈴木庸裕	2 ・心理実習体験記 児童養護施設 4

学部長挨拶



教育・心理学部長
江村和彦

本学部は、2008年度に子ども発達学部としてスタートし、2020年度には教育・心理学部へと学部名を変更しました。さらに、2024年度から子ども発達学科、学校教育学科、心理学科の3学科となりました。

ニュースレターでは、本学部の学生がどんなふうに学び、学生生活を楽しんでいるのかをわかりやすく紹介していきます。ゼミ活動の様子、教員紹介、イベントなど様々な記事で、学部について理解を深め

ていただき、興味をもっていただけることを期待しています。

学生によるコラム

「海外保育研修を通して保育に関わる「あたりまえ」を問い直す」

子ども発達学科4年(松山ゼミ)
相野田幸(あいのた みゆき)
有近晴海(ありちか はるみ)
大塚千尋(おおつか ちひろ)

松山ゼミは、主に3つの学外活動に取り組んでいます。まず1つ目は、外国にルーツのある子どもへの就学支援として多文化保育プレスクールを展開しています。2つ目は、インクルーシブな保育を導入している公立保育所での公開保育・保育検討会に参加しています。3つ目は、海外保育研修です。私たち3人は、ゼミの仲間たちと一緒に、2023年8月に米国ハワイ州を訪れました。ハワイ州は、人種的マジョリティーがいない米国でも珍しい州です。私たちは、ハワイ島で保育実習、大学での講義、学生交流や文化体験などを通して、ハワイの教育制度や、多文化保育が行われている保育環境について学んできました。

研修での一番の驚きは、ハワイの保育所と日本の保育所の保育環境の違いです。例えば、保育士の配置基準です。日本では、現在4歳児以上のクラスでは保育士1人あたり25人(2024年4月変更)なのに対し、ハワイでは4歳児以上は保育士1人に子ども16人です。また、日本の保育所や幼稚園では、一般的な保育環境としてピアノ、黒板、ロッカーや既製おもちゃなどが常設されています。しかし、研修で訪れた全ての保育施設の保育室で日本ではあたりまえのピアノを見ることは、一度もありませんでした。さらに、壁面の豊かさにも驚かされました。日本の保育所や幼稚園で見てきた壁面は、季節を表す造形物や子どもたちの作品を掲示するというイメージですが、ハワイ島で訪れた保育施設には、フォニックスの掲示物はもちろん、月の掲示物、カビの実験など壁一面が、その時々の子どもが抱く興味関心に添う学びの掲示物で埋められていました。さらに、私たちは3つのスクールで保育実習を実施しました。2歳児から6歳児のクラス

に入り、ぶんぶんゴマやハンカチ落としといった日本の保育所で親しまれている遊びを展開しました。研修の事前指導の中で、英語も含め仲間同士でしっかりと実習の準備をしていたはずでしたが、実際子どもたちを前にして英語で活動を展開するのはルール説明だけでも難しさを感じました。しかし、子どもたちに伝わるように簡潔に説明すること、言葉だけではなく、実際に見本を見せることや、イラストにして説明するなど視覚的な工夫など試行錯誤しながら、言語の壁を越えて子どもたちが楽しむ活動を展開できたと学びました。

この研修を通して、ハワイの教育制度や保育環境について学んできたからこそ、これまで、「あたりまえ」だと思い込み疑わなかった日本の保育制度、保育環境について疑問を持つことができるようになり、自分達自身の視野が大きく広がったと感じます。今回の研修を含め、ゼミでの学びを活かし、「あたりまえ」を点検しながら保育の質を向上していける保育者になりたいと思います。



「社会的養護内容演習」（子ども発達学科）の紹介

子ども発達学科3年

中川由奈（なかがわ ゆな）

加藤恋萌（かとう こゆめ）

社会的養護内容演習は、虐待や親の病気、貧困など様々な問題を抱える子どもたちの現状とそれを支援する内容や方法を学ぶ授業です。今年の授業では、施設を巣立った当事者の話、児童養護施設の職員さんの話（子どもと楽しむダンス実践や生活のなかでの話し合い実践の実際）など具体的に学びました。

ダンス実践では、ダンスと音楽を通して、施設の子もたちと職員がつながり、自己表現をすることが娯楽にもなり、自己治癒力も育めることを学びました。自分の好きなことや得意なことを活かして子どもたちと関わるができる環境がとても魅力的だと思いました。

話し合い実践の授業では、実際に職員さんが進行役で施設の子も達とやるように学生同士「話し合い」を体験しました。「やりたいこと」「困っていること」「わからあい」を紙に書き出しみんなで共有することで、「その場限りにならないこと、また意見がうまくまとめられない子に対して、そのまま終わるのではなく、一人ずつ意思表示ができるのがとても良いと感じました。」「普段はなかなか自分のやりたいことや悩んでいることを他の人に打ち明ける機会がないので、話し合いの場で話すことでスッキリした。」「自分の意見を聞いてもらえることで自分のことを知ってもらえる感覚があり、人に自分のことを伝える自信にもつながった。また、人の意見をきき、みんなで一緒に悩み

ながら伝えることで、その子の力に少しでもなれることがとても嬉しかった。」などが感想です。

また、私たちが実習で出会った「気になる場面」のグループ検討をしました。様々な施設で実習を行っているので、幼児の話だけでなく、小学生や大人を対象とした「気になる場面」も聞くことができます。共感できることもあれば、「そんなことがあったんだ」と普段なら知ることのない場面の話を聞くことができるので、色々な施設を少しのぞき見できた感じがして、とても楽しい討論となっています。



教員紹介 YOUは学外で何しているの

いじめ重大事態の第三者委員会の委員として 学校教育学科 鈴木庸裕



本学の先生方は誰もが「学外」での仕事や役割(役職)をたくさん担っておられます。私もその1つとして、いじめによる重大事態や自死事案などが起こったときの調査委員をいくつかの自治体でしています。この第三者委員会では、被害者や加害者(とされる)児童生徒(関係する児童生徒も)やその家族、遺族、教職員、そして地域の児童福祉、警察、医療機関などに関わりながら、精神科医や弁護士、臨床心理士(公認心理士)、社会福祉士などの多職種の委員とともに話し合いを重ね、1年以上の期間をかけるときもあります。

この活動は子どものためのものであり、子どもたちに何があったのかを明らかにしてほしいという関係者の願いに寄り添うものです。調査では、いじめの有無といった事象だけでなく、子どもの成育歴や家族の生活や価値観、教師や保護者のかかわりなどを何年もさかのぼって収集し、それらを分析、検討、評価、検証していきます。調査とは「これまで閉ざされた人間関係の対話や修復のはじまり」という位置にあります。

よく「うちの子どもはいじめを受けているのではないか」という保護者からの申し立てにより委員会設置される場合もあります。でもこれは苦しんでいる側に問題解決の自己責任を求めるものになります。私は、この調査活動を通じて、そうした自力解決しなければならないという考え方を払拭して支援の輪を広げ、さらに子どもたちや保護者が学校・教育へのあきらめや生涯にわたる苦しみを負ってしまわないようにしたいと考えています。

これらは私の教育実践です。大学の授業やゼミでいじめ問題などの教育課題を扱いますが、学生のみなさんへの問題提起は、こうした調査経験(実践)からにじみ出たもの、つまり、自身の研究と実践との往還や交互作用によるものです。このように、いつも講義室と学校現場という境界のない生活をしています。

授業紹介「総合演習Ⅰ」全体企画

学部の1年生全員が集い「ともに学び、ともに育つ支援」を考えました。

初年次教育科目である「総合演習Ⅰ」の全体企画として、6月12日に学生支援センターの小林真弓先生に「ともに学び、ともに育つ支援」というテーマで、ご講義をいただきました。また講義では、障害のある学生とサポートしている学生が登壇し、実際の学生生活や活動について、お話をさせていただきました。

フロアには、教育・心理学部3学科の新入生、教員を合わせて約220名が集いました。日本福祉大学は、体に障害のある学生が多く学んでおり、授業参加を支援する体制が充実しています。それには、教職員のみならず多くの学生がサークル活動やボランティアを通じて積極的に関わっています。今回の講義は、こういった本学の取り組みなどを、新入生に知っていただき、自分にできることは何かを考える機会として企画されました。

講義では、小林先生のご考案で、二人の話の間にペアワークで「聞こえない生活プチ体験」が行われました。これは、ある言葉を1人の学生が声を出さずに口の動きだけで表現し、もう一人がその言葉を読み取るというものです。読み取る側は、聞こえないことの大変さを理解し、伝える側も口を大きく開けてゆっくり表現するなど工夫がみられました。また、「もし〇〇(障害)があったら」というグループワークが行われました。これは、最初個人でワークシート記入後、4人ぐらいのグループでシェアするというものです。最初は緊張さみだった学生たちも、自らワークに参加するうちに、積極的になっていく様子が見られました。

最後に、本学で取り組んでいる障害を持つ学生の支援活動について、新入生へのメッセージ(活動のススメ)の意味も含め、

ご紹介をいただきました。日常的に「ともに学び、ともに育つ実践」を体験することで、社会福祉的課題を見つけ、解決策を考える視点も養われます。今回は、新入生の皆さんにとって、有意義な体験とともに、貴重な勉強の機会になったのではないのでしょうか。



サークル 合奏研究会吹奏楽団（合奏研）の紹介

日本福祉大学合奏研究会吹奏楽団(略称 合奏研)です。私たちは、毎週木曜日に大学内の文化ホールで活動しています。合奏研には、51名の部員が所属しており、吹奏楽を高校から続けている者、大学から始めた者など様々です。主な活動内容は、コンクール、地域の依頼演奏、学校の式典、定期演奏会などです。

コンクールに向けては、県大会金賞を目標に活動しています。この目標達成のために、学生主体で練習に取り組んでいます。経験者から初心者まで、団には色々な人が所属しているので、個人差はありますが、暖かい雰囲気毎日練習に励んでいます。ホールを使用して常にコンクールの本番を意識しながら練習することができています。また、日々成長できるように学生中心でお互い教え合っ切切磋琢磨しています。

また、合奏研では毎年12月に知多半田駅から徒歩3分のところにある雁宿ホールで定期演奏会を行なっています。クラシックやポップスなど幅広いジャンルの音楽を演奏しています。曲決め、演出、練習など学生同士で話し合いを重ね、よりよい演奏会にできるよう考えています。(今年は12月8日)この演奏会では1年間お世話になった合奏研の関係者の方々やいつも応援してくださっている地域の皆さまに感謝の気持ちを込めて演奏させていただきます。

合奏研は、地域からの依頼演奏にも力を入れています。知多半田駅の近くにある旧中埜家住宅でミニコンサートをさせていただく他、今年度は6月30日に知多奥田駅の前に建設された美浜町陸上競技場のオープニングで演奏する機会をいただきました。担当の方との連絡のやりとりや、当日のスケジュールを考えたりすることも学生中心に行っています。このように学内だけで

なく地域との繋がりも大切にして活動しています。これから多くの方々に合奏研は私たちの活動の成果をお伝えできるように頑張ります。

